大塚敬節
矢数道明 責任編集

近世漢方医学書集成

57

尾台榕堂 一

名著出版 刊

NANJING UNIVERSITY OF CHINESE MEDICINE
南京中醫藥大學
1954
南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 57
尾台榕堂(一)
第II期 全30巻

昭和五十五年十一月二十五日 発行

編者 大塚敬節
矢数道明

発行者 中村安孝

発行所 株式会社 名著出版
東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一一五)一二七〇番(代)
振替口座 東京七—一〇六〇六番

予約限定版

製版所 株式会社 日本写真製版社
印刷所 有限会社 伊藤印刷
製本所 辻本製本所

落丁本・乱丁本はお取替えします。

3347—0908—8324

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫

凡　例

一、本書第五十七巻「尾台榕堂㈠」には、『類聚方広義』を収録した。

一、本書は全て影印版によって収録した。影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮小し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、本文中の蔵書印及び所蔵者による書き込み等は全て省略した。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

類聚方広義　版本（安政三年版）　一巻一冊（大塚敬節・矢数道明所蔵）

一、解題は藤平健（千葉大学医学部講師・日本東洋医学評議員）が執筆した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

儒医両道の仁医
尾台榕堂先生略伝

藤平　健

一　はじめに

名著出版の第II期『漢方医学書集成』の第五十七～五十九巻の三巻に、尾台榕堂翁の著作が集録されるに当って、その解説を書くように、しかも長い方がなお結構、という依頼をうけた。

ところで、『漢方の臨牀』誌の第百号記念特集に当って、「日本の漢方を築いた人々」の伝記集を作ろうということになって、古方系の末席をけがしているとの理由で、私は尾台榕堂翁の分を受けもつことになった。昭和三十六年のことである。榕堂先生ほどの有名な人のことであるから、先生の伝記のようなものも一つや二つではあるまい。それらを集めてきて、ノリとハサミでで

ち上げれば、何とか一応、形の整ったものができ上がるだろう。そんな安易な気持で引きうけたのであったが、調べてみると、予想に反して、伝記らしいものは皆無なのであった。わずかに安西安周氏の『日本儒医研究』(竜吟社、昭和十八年刊)という著書の中の数ヵ所に、榕堂翁の名や著書の引用が散見するだけなのである。しかし、糸は意外な所からほぐれはじめて、遂にはほぼその全容に近いものがわかるようになったのであった。

以下に述べる所は、その時の『漢方の臨牀』誌第百号記念特集に載せたものとほぼ同じで、それにほんのわずか手を加えたものである。

「いずれ先生の全集でも出る暁には、更に一層の努力をもって、稿を改め、完全に近いものとするために、力を致したいと思う。」と、その末尾にも書き記したのであった。しかし、尾台浅嶽の師岑少翁の長子岑四娟と榕堂翁との関係などについて、その後も少しは調べたのであったが、結局は更に新しい事実は発見出来ずにしまったのである。そのようなわけで、前述「第百号記念特集」の蒸し返しになってしまったことをお許し願いたい。

文中、榕堂翁のことを何と呼ぼうかと種々考えたが、迷った揚句に「先生」と記すことにした。日頃尊崇している榕堂翁を、いくら学術論文に近いものにしても、「榕堂、榕堂」と呼び捨てにすることは、私としては耐えられないことであるし、かといって幼少時の先生を、「翁」とよぶのはあまりに滑稽に思えたからである。

二　生いたち

信濃川の広い河原を前にし、鬱蒼とした杉木立におおわれた陣カガト山のゆるやかな斜面を背にした、北越は魚沼郡中条村（現在の新潟県十日町市中条）の中ほどの地の、簡素な家に、先生が呱々の声をあげたのは、北辺の地に漸く暗雲の漂いはじめた寛政は十一年（一七九九）のことである。遠祖は高田藩の浪士小杉玄蕃であって、二代以後は累代医を業とした。二代を三伯、三代を三適、四代を三鼎、五代を三省、六代を三圭と称した。三適は紫峰と号し、先生の祖父に当り、三鼎は支峰[1]と号し、先生の父である。三省は長兄であって、蘿斎と号し、三圭はその子で、先生の甥になる。

先生は父三鼎の四男として生れ、幼名を四郎治といい、名は元逸、字は士超、榕堂又敲雲（こうう）と号し、通称を良作と称した。

先生は幼小の頃から、極めて聰明であった。祖父はこの孫の頭をなでながら、「ぼうずはいまにきっとえらい奴になるじゃろう[2]」と云うのを常とした。

近くに円通寺という宗洞宗の古刹があり、当時ここに惟寛和尚、号を新雨庵荷笠（かりつ）という禅師が住していた。学徳ともに優れた禅師で、特に詩文に長じ、当時の碩学、鴻儒との交友が多く、文名は中央にも高かった。

この荷笠禅師について、先生は経書の素読を受けた。禅師と先生との年齢の開きは凡そ三十三歳であるから、もし先生が六歳の頃から師事したとすれば、禅師が四十歳から五十歳にかけての、最も油の乗り切った時期に教授を受けたことになる。ところで禅師は、六歳で円通寺に入り、のち江戸駒込の吉祥寺に於て研鑽苦辛を積み、文化十一年七月円通寺の住職に任ぜられているが、いつ江戸から帰越したかということはわかっていない。したがって、先生が果して何歳から禅師に師事するようになったのかは明かでない。けれども、文化六年（一八〇九）から同八年（一八一一）にかけて、釧雲泉[3]と亀田鵬斎[4]とが相共に北越に遊歴して来て、二人が共同して十日町の酒井家の庭を造園した。[5]この間に、荷笠禅師は塾を開いて、これを妻有塾[6]と名づけ、近在の子弟を教育した。この塾には鵬斎も屢々やって来て、禅師とともに講師の列に加わった。[7]この塾生の中でも特にすぐれて頭角をあらわしていたのが、先生と、その兄の蘿斎と、岡田雲洞の三人であったという。

勿論、禅師ばかりではなく、祖父や父についても学問を受けたに違いない。『方伎雑誌』第三巻には「先考支方先生ハ、余十三歳ノ時、四十七歳ニテ、身マカリ玉ヒヌ。家兄ハ僅ニ廿三歳。家道ノ衰謝、云フベカラズ。此時王父紫峰君、已ニ八十八歳ニナラセラレ、尚矍鑠トシテ、居玉フ故ニ、余日夜書ヲ誦読講習セリ。此冬王父君モ、マタ木ニ就キ玉ヒヌ。故ニイカントモスルコト能ハズ。因テ十六歳ノ春、断然トシテ東遊セリ。」とある所からみてもそれは明かである。しかし

恐らく家庭にあっては、医学上の教授の方が多かったのではあるまいか。そしてまた先生は、この頃からすでに医家として身を立てる決意を深くしていたのではなかろうか。引用文中の「故ニイカントモスルコト能ハズ」の一語は、よくこの間の事情を物語っているものと思う。儒学や詩文に関する限りは、荷笠禅師という立派な師がいて、まだまだ教えられるべき多くのものが残っていた筈だからである。『方伎雑誌』第一巻の中にしるされている、医家としての初陣の記は、単に門前の小僧的な見よう見まねからのものではなく、既に医家としての知識を一通り身につけていたものであることを立証している。即ち「余十三歳ノ時、病家診ヲ請ヒ来レリ。適々長兄蘿斎他出シテ不在也。王父紫峰君、汝往テ診シ来ルベシト命ゼラル。因テ診視シテ帰レリ。王父君其病症ヲ問ヒ玉ヘル故、傷寒ニテ、頭痛破ルガ如ク、悪寒、発熱、喘シテ一身疼痛、脈浮数ニシテ力アリト申シケレバ、汝何レノ方ヲ与フルヤト尋ネ玉フ。余、麻黄湯ニテハ、イカガト、伺ヒケレバ、王父君笑ヲ含ミ、デカシタリトノ玉ヘル故、三貼調合シテ、温服大発汗スベシト命ジ、使ノ者ヲ帰シタリ。翌朝又診セシニ、大汗シテ、苦患脱然トシテ退ケリト云フ。余熱有ユヘ、小柴胡湯ニ転ジタリ。日ガラ立タズ復故セリ。是余ガ初陣也。翌年ハ傷寒流行ニテ、余ホド療治セリ。陽症多ク、大抵白虎湯、黄連解毒湯、三承気湯等ヲ用ヒタリ。余熱ニ至リテモ、柴胡加石膏湯、竹葉石膏湯等ノ症多カリキ。思フニ田舎間故、黄口ノ者ニテモ、治療ヲ委付セシ也。病家ノ蔭ニテ、早ク実地ニ渉ルコトヲ得シハ、僻地ニ生マレタルガ、反テ多幸ト謂フベシ。」とあって、医家

としての手ほどきは、すでにかなり受けていたものであることがわかる。またこの治験の内容からみて、祖父や父の医業の系統は、古方に属するものであったことがわかる。

さて先生は、年歯十三歳で、医学の師とたのむべき祖父や父を一挙に失い、既に医師として立ってはいたが、兄の蘿斎は未だあまりにも若く、したがって医学を修める上のよりどころをなくして、今後いかにすべきかということに、日夜思い悩んだことであろう。前述の「故ニイカントモスルコト能ハズ」の一語のある所以である。さらに三年の間、禅師について経書の学習に励んだが、医学に対する向上の熱意は、日に月に募る一方であったのであろう。このような僻地に、師もなくぐずぐずしていたのではどうにもならぬ、何とかして良師につきたい、それにはどうしたらよいか、とあれこれ考え迷ったに違いない。『方伎雑誌』は先生の晩年の作であるが、その第三巻の中に「仲景ノ書ヲ誦読諳記シタリトモ、必伎ノ妙処ニ至ルコトハ難シ。故ニ良師ニ従学シテ、其事実ノ開闔ヲ見ルベシ。古人モ百聞ハ一見ニ如カズト云ヘリ。(中略)師伝ナクテハ、迚モ名手ニハ至リガタシ。故ニ師ヲ択ムコト肝要也。博覧ノ人、崇患危症ニ臨ミ、狼狽失措、平日ノ議論用ヲナサズ、庸工凡手ト異ルコトナキハ、皆学習ヲ経ザルガ故也。学医ハ匙ガ運ラヌナドト、俗人ノ嘲ルモ理也。イヅレニモ、良師ニ従学シ、刻苦研鑽シテ、技術ノ妙処ヲ晤ルベシ。」とある。これはかつて良師を得んとして悩み、目的がかない師事するに及んで、案に違わず良師につくことの有難さや、有益なことを身にしみて感じとった己の経験にもとづいて述べられたものに相違

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なく、これをみても、祖父、父亡きあとの三年間の医学についての机上の学問に対する疑問や悩みが、恐らくかなりに深いものであったであろうことが想像される。

そこで先生は、禅師に向って、その苦衷をしばしば吐露したことであろう。「まあ焦らずに待つがよい。拙僧が屹度そのうちに何とかして進ぜよう」とでも禅師は答えたことであろう。江戸の文人、墨客と交友の深かった禅師の胸のうちには、この訴えに対してすでに些か期する所があったのではあるまいか。

(1) 父の号は、芳野金陵著『金陵遺稿』中の「尾台士超墓碑銘」では支峰、『方伎雑誌』巻三の五丁裏及び巻末の著書目録の中では支方、坂口五峰著『北越詩話』上巻九八六頁では子方と、それぞれ異った文字が用いられている。

(2) 『金陵遺稿』「士超墓碑銘」中に曰く、「王父紫峰君毎摩挲其頂曰。此児必栄家門矣」。

(3) 江戸時代の南画家。元、明の南宗の画法をきわめ、最も山水に妙であった。晩年、北越におもむき、新潟にとどまり、文化八年秋、出雲（越後国出雲崎）に遊んで、十一月同所で客死した。（平凡社刊『世界大百科事典』より抜萃）。

(4) 江戸時代の儒者。書画ことに草書と、酒豪と、豪宕な性格からでた奇行をもって有名。経学も精確であり、漢詩文では山本北山とともに個性をとうとび清新の風を重んじて、李王擬古の江戸の文壇を一変せしめた。（同前）。

（5）現在もこの庭園は十日町市山谷に残っており、積翠荘と名づけられている。

（6）往昔、中魚沼郡一帯は妻有荘といわれていた。塾名はこれに因んで名づけられたものであろう。

（7）岡田雲洞、少時、円通寺荷笠に従うて経を受け、古学に精し、喜みて和漢の史乗を読み、旁ら韜略を講ず。故に世の治乱興廃より、諸家の系譜に至るまで、諳んぜざる莫し。余事詩文を嗜み、小杉蘿斎、尾台榕堂と社を結びて講習す。（『北越詩話』より）。

三　出　府

先生が江戸に出るまでのいきさつを、『中魚沼郡誌』[1]は「四郎治年甫めて十三、父を喪ひ、兄三省蒲柳の質にして、養育の任に堪えず、四郎治を親戚某老農に託す、四郎治学を修め以て父祖の業を継がんと欲し、夜に円通寺に通い、惟寛禅師に就て経書を学ぶ、文化十一年冬、夜に乗じ、潜に脱して江都に至り、医家尾台浅嶽の家に僕たらんことを請ふ」と記し、『中魚沼郡風土志』[2]は「家兄三省、蒲柳の質にして、氏を教育する能はず、親族老農某に托す、四郎治幼にして穎敏、夙に習学に志あり、毎夜円通寺惟寛禅師に就き経書の素読を受け、年十六、寒夜潜かに脱して江戸に到り、介を求め、当代古法吉益派を以て嘖々たる医家尾台浅嶽の僕となる」と記している。しかし、先生自著の『方伎雑誌』には、前にも引用したように「此時王父紫峰君、已ニ八十八歳ニナラセラレ、尚矍鑠トシテ、居玉フ故ニ、余日夜書ヲ誦読講習セリ」とある所からみて、親戚

某老農にあずけられたというのは少々疑わしい。

また、前記の『郡誌』及び『風土志』には、「夜に乗じ、潜かに脱して江都に至り」とか、「寒夜潜かに脱して江戸に到り」とか記されているが、これも亦些か疑わしい。すでに引用したが、『方伎雑誌』には「故ニイカントモスルコト能ハズ。因テ十六歳ノ春、断然トシテ東遊セリ。」と記されてあるし、また、先生自著の『閑窓筆録』には、「文化戊ノ春（文化十一年―一八一四）、余年十六、荷笠禅師ニ随ヒ、始メテ江戸ニ来ル。是ノ歳禅師越後円通寺ニ住持為リ」と誌されている。これらから察すると、やはり先生は家にあって、経書は禅師につき、医学は祖父や父君について、勉励これつとめていたが、十三歳のときに医学の師たる父や祖父を亡くし、これに代る師を見出すために東遊を志した、とみる方が至当であろう。

「夜ニ乗ジ潜カニ脱シテ」とか、「寒夜潜カニ脱シテ」とか、または先生自からの著に「断然トシテ東遊」とかの言葉があるところからみて、出府については、家人親戚等の反対などがいくらかはあったのかもしれない。兄は虚弱であり、「家道ノ衰謝、云フベカラズ」（『方伎雑誌』。前出）という具合では、兄弟二人して家道をもりたててくれなくては困るではないか、という意味での反対は、当然あったものと考えられる。

しかし先生の決意は飽くまでも堅く、「断然トシテ」これを振り切ったのであろう。

さてそれでは、先生はどのような経緯を経て、尾台浅嶽の門に入ることとなったのであろうか。

『郡誌』には「江都に到り、医家尾台浅嶽の家に僕たらんことを請ふ」となっており、『風土志』には「江戸に到り、介を求め、……医家尾台浅嶽の僕となる」となっている。しかし常識的にみて、一介の少年がいきなり江戸に出て適当な師がみつかるわけもなく、またみずしらずの土地で紹介を求め得られる筈もない。

たびたび先生から相談をかけられた禅師は屢々来越してくる文人墨客たちに、江戸在住の医家の状況について、種々と尋ねたことであろう。中でも特に親交のあった亀田鵬斎に対しては、小杉家は代々古方の系統の医家であること、当人は将来有望な青年であること等を、こと細かに話して、師事するにたるべき人物の選定を懇にたのんだことであろう。そこで鵬斎がいろいろと調査もした上で、白羽の矢を立てたのが尾台浅嶽だったのではなかろうか。

『郡誌』には「文化十三年、師（浅嶽の事）の給を得て、贄を亀田綾瀬の門に執り、攻究すること年あり、学大いに進む、会々芳野金陵も亦其の門にあり、共に与に切磋し、遂に断金の交を結ぶ」とあり、『風土志』にも「文久十三年、師の給を得て、贄を亀田綾瀬に通ず、攻究年あり、学大いに進む」となっている。亀田綾瀬は鵬斎の子で、やはり父同様すぐれた儒者である。浅嶽の紹介で綾瀬の門に入ることとなったらしいこれらの記録から察して、恐らく浅嶽は亀田父子と、多少の面識か、又は学問上の何等かの関係があったのではなかろうか。しかも浅嶽は、古方再興の医傑吉益東洞の高弟岑少翁門下の高足である。このような関係から、鵬斎は浅嶽を推挙し、浅

嶽はまたのちに先生に綾瀬の門に入ることをすすめる、というわけあいとなったのではあるまいか。

かくて先生は、禅師に随って、春まだ浅く、雪も未だ軒を越す越後の国をあとに、ここに青雲の志に胸をふくらませて、はるばると江戸に向って旅立ったのである。『閑窓筆録』の前出の箇所には「此歳、禅師越後円通寺に住持たり」となっており、『風土志』の荷笠禅師の項にも「文化十一年七月円通寺に晋山す」となっているところからみて、恐らく禅師は、住職となる内意を得て、その前に江戸で為すべき何等かの行事か用事があったのであろう。これを機に、先生を江戸に伴うこととなったものと思われる。すでにこのときには、禅師と浅嶽との間で、書翰のやりとり等もあって、入門の手筈は万端整っていたに違いない。

(1) 『中魚沼郡誌』中魚沼郡教育会編　大正八年十二月二十日発行

(2) 『中魚沼郡風土志』一名案内　石原信著　大正元年十月二十日発行

四　師尾台浅嶽

尾台浅嶽は通称を良作と称し、又右善とも称した。浅嶽は号で、名を兼達といった。浅嶽と号したのは、生家が信州浅間山の南麓にあって、朝夕この秀峰を仰ぎみて育ったからであろう。

遠祖は信州小田井宿（現在の北佐久郡御代田町）の郷士小田井城主小田井又六郎の正系と伝え

られ、代々中仙道の宿駅小田井宿の下問屋を継承していた。浅嶽はその数代目から分家した一代目桔梗屋の子息である。

浅嶽がどのような経路を辿って、岑少翁の門に学ぶように至ったかは、殆ど不明に属する。前述芳野金陵の「尾台士超墓碑銘」には「岑氏、東洞氏ニ親炙シ、其道ヲ関左（関東の意）ニ首唱ス。……翁（浅嶽翁のこと）ハ業ヲ岑氏ニ受ケシ者也。君（榕堂先生のこと）其説ヲ聞キ、大イニ悦ビテ謂フ、真ニ是レ長沙ノ正派、活人ノ手段此ニアリト」とだけあって、浅嶽の事に関しては深くは触れていない。

先生自身も、師浅嶽の事に関しては、極く僅かにしか言及していない。前出の、『方伎雑誌』第三巻の「良師ニ従学シテ、其事実ノ開闔ヲ見ルベシ」という箇所で間接に触れている以外には、同じく第一巻の腹診法を述べた所で「是東洞先生腹診ノ法。岑氏之ヲ受ケ、余ガ先人ニ授ル所ナリ」というところと、同じく第二巻の厚朴の品質を述べた所で「五十年前、先師御普請役人ニ頼ミ、内内少少バカリ取寄セシコトアリ」というところの二箇所のみに過ぎない。

これに反して、岑一門に言及している箇所はかなりに多い。即ち『橘黄医談』には「独リ貉丘岑先生、屹然トシテ旗幟ヲ江都ニ樹テ、高大ヲ芙蓉ニ争フ。一時英才其門ニ出デ、疾医ノ道、是ニ於テカ復興ル。先生ノ持傾扶顛ノ功、大ナリト謂ヒツベシ。先生鹵徳邵高ナルヲ以テ、門人或ハ其著書ヲ請フ。先生乃チ曰ク、先師薬徴ヲ作リテ、薬能ヲ明カニシ、方極、類聚方ヲ撰シテ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com